

# 住宅設計論における行為描写の空間図式と設計意図

奥山研究室 20B50166 上田 菜月 (UEDA, Natsuki)

**1. 序** 日常生活における具体的な行為を想定することは、住宅設計の基本的な要件のひとつである。建築家の住宅設計論においても、生活のなかで生じると想定される行為の様子が記述されることがあり、このような行為描写における場の分布やその具体度を建築家の空間構想における空間図式として捉えることができる。また、これらの設計論からは、街と関わる新たな生活像や人々の活動を触発する住宅の構想といった、行為と空間の関係に基づいた多様な設計意図を読み取ることができる。そこで本研究では、現代住宅の設計論における行為描写の空間図式と設計意図を検討することで、人の行為を基点に空間を構想する建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

## 2. 行為描写の空間図式

**2-1. 行為の内容** 資料とした設計論<sup>1)</sup>において、行為描写にみられる行為の内容を整理し、単純な身体〔動作〕と具体的な〔活動〕から捉えた(表1)。また、行為の主体が具体的に想定されているものについてはその属

性を〔住人〕、〔非住人〕で捉えた(表2)。

**2-2. 行為描写の空間図式** 行為描写において行為が展開される場の分布<sup>2)</sup>と描写の具体度から、行為描写の空間図式を捉える(図2)。まず場の分布は、住宅全体または住宅の中の大半を《全体》、散在する複数の場を《分散》、1つの場またはまとまった複数の場を《偏在》として捉えた。次に、場の描写の具体度を建築の部位や家具といった要素の有無から検討し、その組合せを具体度の低い順に〈a〉〈b〉〈c〉〈d〉に分類した。

**3. 行為描写の設計意図の意味内容** 行為描写とともに示される設計意図を抽出し、その意味内容をKJ法<sup>3)</sup>を用いて比較検討した(図3)。その結果、季節の変化や樹木などの外部環境を生活に取り入れる【外部】、農業や近隣住民との交流といった社会的活動を取り入れた生活像を提案する【拡張】、家族のあり方に着目する【家族】、身体感覚に基づいて空間を創出する【身体】、室の機能を限定せず人々の活動を触発する【機能】の大枠で捉えた。さらに設計意図には、人の行為や住宅の

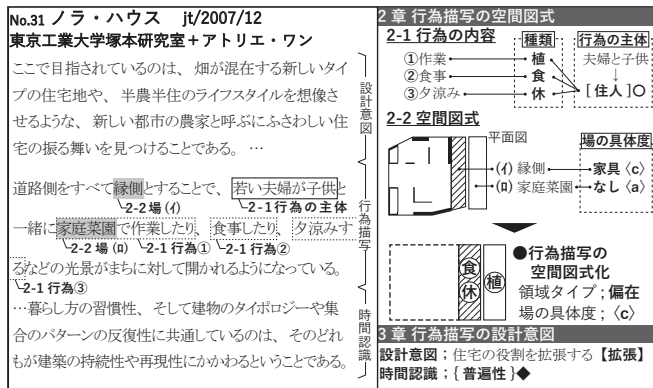


図1. 分析例

表1. 行為の内容

動作	記号	例	数
歩く	一	歩く 座る 揃む	230
食	食	食事 飲酒	44
観	観	映画観賞 読書	30
話	話	団樂会話 集会	46
遊	遊	遊ぶ ビクニック	25
休	休	夕涼み	19
眠	眠	睡眠 昼寝	27
衛	衛	入浴 家事	17
勉	勉	勉強 作業 設計	14
種	種	収穫 野菜を干す	15

表2. 行為の人物

人物	記号	例	数
住人	○	家族、兄弟、夫婦、飼犬	66
非住人	□	友人、訪問者、近所の人	43

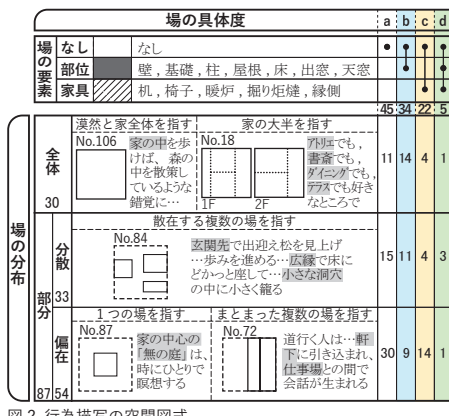


図2. 行為描写の空間図式

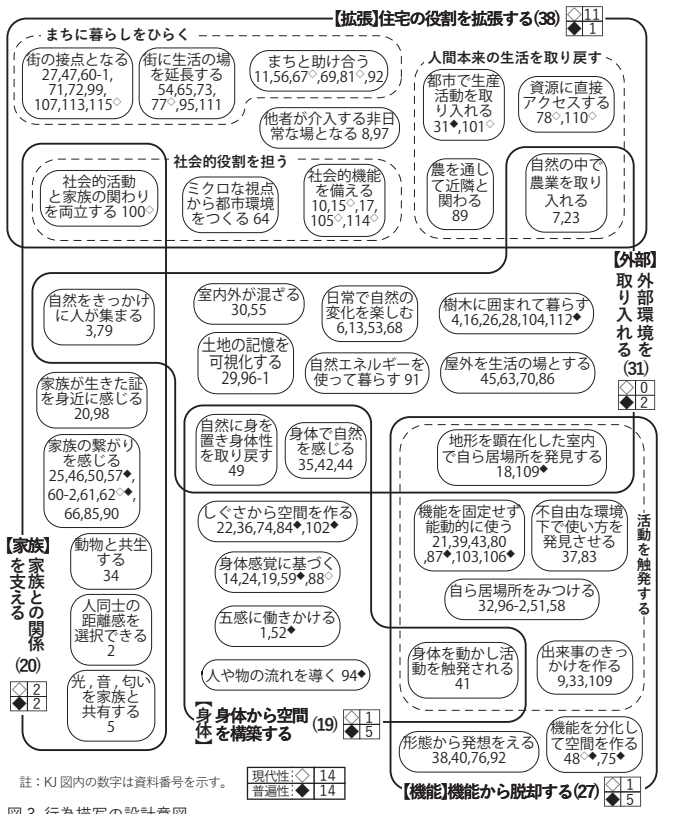


図3. 行為描写の設計意図

註: KJ 図内の数字は資料番号を示す。現代性: ◊ 14 普遍性: ◆ 14

あり方を現代的な状況を前提に考えるものと、普遍的なものとして考えるものがみられ、前者を{現代性}、後者を{普遍性}とした。【拡張】では{現代性}が、【身体】では{普遍性}が多くみられたことから、前者は生活様式の変化に応じて住宅の役割を再考するもの、後者は身体から住宅の普遍性を思考するものと捉えられる。

#### 4. 行為描写の空間図式と設計意図の対応

行為描写にみられる建築家の思考について、空間図式と設計意図との対応関係を検討し図4に示した。

【拡張】では空間図式の《偏在》が3分の2を占め、その大半が要素を特定しない〈a〉と家具を伴う〈c〉であり、行為の内容は〔活動〕が多くみられた。一方で【機能】と【身体】では、空間図式の《全体》が半数近くであり、その過半が部位を伴う〈b〉であり、行為の内容は〔動作〕を含むものが大半を占めた。生活様式や住宅の役割を再考しようとする前者は、局所的で具体的な行為が想定されるのに対し、一般的な機能論にとらわれず身体に基づいた普遍的な住宅を構想する後者は、柱や床などの建築の要素における身体の単純な動作が想定されるという、行為に基づく建築家の構想の対極的なあり方を示していると考えられる。

【外部】では空間図式の《分散》が比較的多く、また様々な行為を想定するものも多くみられた。これらは外部空間

とつながる特定の場における行為を具体的に想定することで、自然を取り入れた成生活像を構想するものと考えられる。【家族】では《分散》が比較的多く、その大半が具体的な場の要素を伴わない〈a〉であり、様々な行為を想定するものも多くみられた。このことから、家族という集団のあり方を再考する際は、複数の場で起こる家族間の行為を具体的に想定するものと考えられる。【拡張】では〔住人〕〔非住人〕が多くみられ、近隣住人との関わりを様々な行為として構想する傾向が読み取れる。

5. 結 以上、住宅建築の設計論から、行為描写の空間図式と設計意図を検討した。その結果、現代的な生活様式に即して住宅の役割を再考する場合は、具体的な行為とともに新たな機能を付加的に提案し、行為から身体的かつ普遍的な建築のあり方を考える場合は、原初的な動作を端緒として住宅全体を構築するという、人の行為を基点とした空間構想における思考の一端を明らかにした。このことから行為を基点とした空間構想には、社会状況に即した生活像を空間化する他律的側面と、身体を端緒として普遍的な空間を創出しようとする自律的側面があらわれているといえる。

註1) 資料として建築専門誌である住宅特集において2000-2022年に発表された住宅作品のうち、行為描写とその意図が明確に読み取れる全115作品を扱い、得られた行為描写と設計意図の組合せからなる117資料を対象とする。  
2) 場の特定に際して、行為描写に加え平面図を用いた。  
3) 資料に対する行為描写の場が単数ものが42件、複数のものが75件であった。複数の場合は場の組合せによって空間図式を位置づけた。  
4) 川喜田二郎『発想法』中央公論社、1967年6月

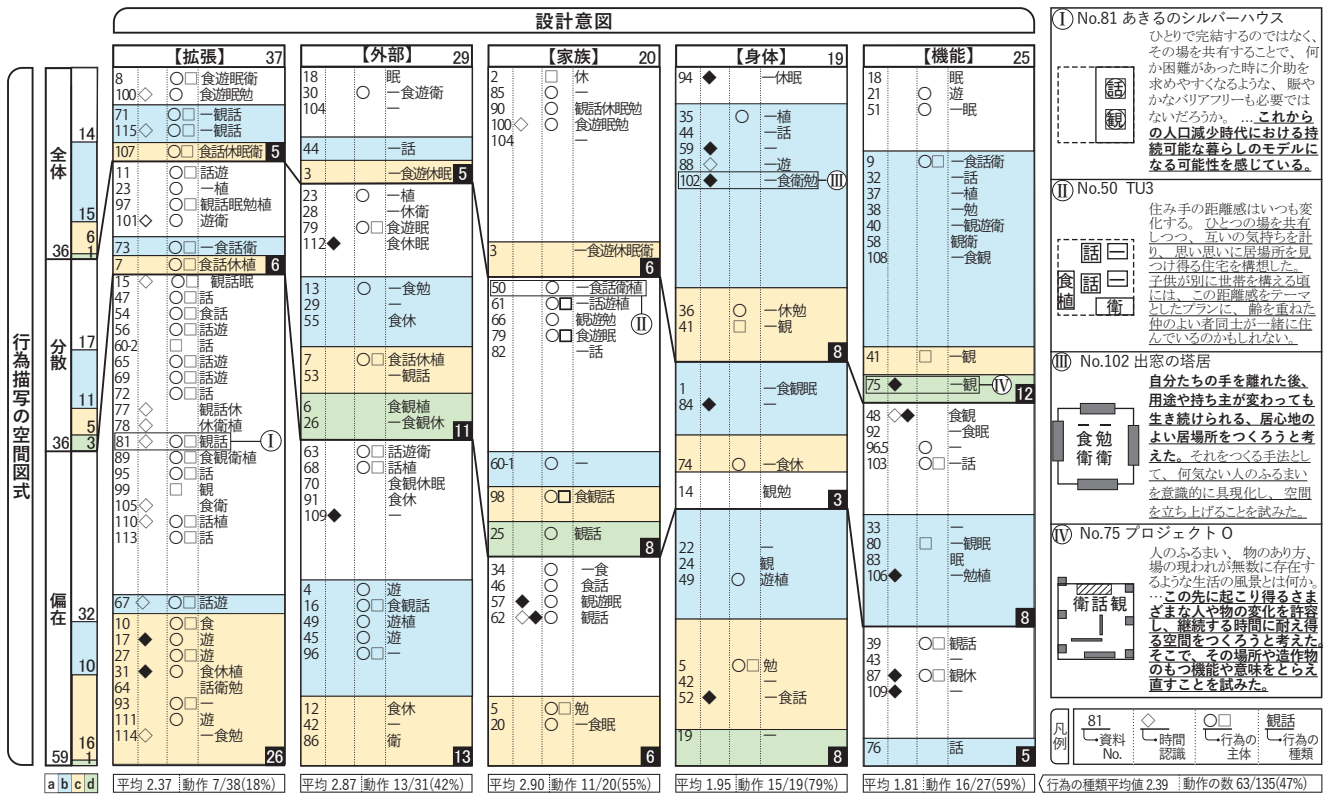


図4. 行為描写の空間図式と設計意図の対応関係